

【俳句部門】

▽最優秀賞

太陽に麦の金色輝けり

熊本農2年 池田 海星

【評】「太陽に」で軽くとめて、一気に「麦の金色輝けり」と、麦秋の天地の大いなる稔りみのを詠んで勢いがある。省略の力であり、作者の農業への情熱と豊饒ほうじょうの大地への感謝がほとばしるような感動の一句。この農業への誇りは、同時作の〈夏の空農魂宿る土を裂く〉と〈梅雨明けて大地に響く鋤の音〉に於いても同様。まるで宮沢賢治の農魂と詩情を見るようだ。なお、この句の「金色」はもちろん、「こんじき」とよんでほしい。(岩岡)

▽優秀賞

夏の夜鮮やかになる人の顔

熊本工1年 内田 空良

【評】猛暑の中、能面のような昼間の顔たちが生き生きと鮮やかに変化する。そんな夏の夜の存在に作者は気付いたのだ。これは小さいようだけれど大きな気付き。それを詩にした。(西口)

こっぺぱんまた食べに行こ秋うらら

尚綱3年 北村 紗希

【評】おいしいコッペパンの店。また食べに行こ、の口調の軽さとコッペパンの軽さ。親しい人と楽しい時間を共有できる幸せの実感を「秋うらら」が支えている。季節の捉え方の妙。(西口)

ラムネ瓶打ちつけ取り出す夏休み

球磨中央1年 谷川 朔磨

【評】ラムネ瓶の中に光るビー玉。取り出すには破壊するしかない。欲しいものを手に入れるためにあえて危険な行為をしてしまう若いわい驕り。ガラスの破片のきらめきのような夏休み。(西口)

殺風景な私をむかえるチューリップ

尚綱1年 高橋 真歩

【評】春は憂鬱^{ゆううつ}。新しい環境に馴染^{なじ}めるだろうか。春色に輝いている周囲のものと対照的な自分を、「殺風景な私」と表した。チューリップの優しい明るさに救いがあったいい。(西口)

青二才夏野を走る夢追って

球磨工2年 黒木 琉

【評】自分のことを「青二才」とよんでいるところが、大胆で自由。「夏野」がいかにも若く、一気に思いを吐露して、さわやか。(岩岡)

▽入選

村上愛梨(文徳1年) 本多美智瑛(尚綱1年) 山田哲平(熊本工1年) 砂川ひかり(熊本農2年) 松田拓海(熊本農2年)

▽努力賞

井上柚南(尚綱1年) 栃原和奏(球磨中央1年) 富永マオ(熊本商3年) 穴井ひなた(熊本農2年) 清永多葉沙(球磨中央1年) 吉田日和(熊本工1年) 佐藤美空(球磨中央1年) 森高愛央(熊本農2年) 米野沙弥香(水前寺高等学園1年) 尾田ひなた(ひのくに高等支援3年)

【総評】今回は投句数もふえましたが、何より生活実感のある力強い作品に出会えました。日頃の感動を深くとらえて、まるで日記のように短い一行の詩で表現することは、楽しいことです。

最優秀句の「太陽に」、優秀句の「夏の夜」、入選句の「月光や」、「夏の日に」、努力賞の「自転車」、「夏の蝶」などはどれも、高校生らしい若々しい写生句で、直感と感動に満ちています。また、「ラムネ瓶」、「殺風景な」、「青二才」、「溶けていく」、「炎天下」、「五月雨に」などの句は、自分の内面世界へ深く分け入った魅力ある作品です。人生にはその年代にしか詠めない句もあります。これから自分の人生の良き伴走者として俳句を詠み続けてください。俳句はその時々つくって楽しく、また、ふり返ってみて楽しいものですから。(岩岡中正)

多くの字数を使って作者の見たものや体験したことを具体的に描けば描くほど、その再現に近づけます。しかし、それでは読者側の自由が奪われかねません。俳句はほとんど沈黙に近い文芸です。面白いことに、情報量の乏しさ、言葉の少なさは、むしろ読者の想像力を掻き立てます。もちろん、作る側にはぎりぎりのことばの選択が求められます。今年も、多くの作品の応募がありました。その中から、特に自分の生活を生き生きと切り取った、個性の輝く俳句を選びました。どうか、〈作る〉で終わらずに他者の作品を味わってみてください。声に出し

てリズムや響きを味わうことをお勧めします。俳句の謎を自分流に解くのは面白い作業です。さらに、数人の仲間と互いの作品を鑑賞し合うことで、また新しい発見ができるはずです。そんなこんなが、〈遊び〉です。ことばで遊ぶって、楽しくて素敵な体験です。俳句は、そんな遊びに最も近い場所に在る^あ文芸です。
(西口裕美子)

【短歌部門】

▽最優秀賞

張り詰める空気がなぜか心地いい汗つたう頬弦の鳴る音

玉名工2年 村田 菜緒

【評】弓道部での練習中の一瞬を見事に捉えた作品。下の句の「汗つたう頬」「弦の鳴る音」という具体的表現が緊張感を醸し、上の句の「心地良き」に繋が^{つな}っている。音律も美しく、緊張感あふれる秀作である。今年も昨年の野球部に続き部活を詠んだ作品が最高賞を射止めた。(橋元)

▽優秀賞

夏休み親と一緒に広島へ平和を願う気持ちが増えた

文徳1年 坂口 凜映花

【評】一行詩のようでリズムが幼いと思われるかもしれないが、下の句の措辞の純真な気持ちの発揚が何とも尊い。大人が忘れてしまったようなものにはたと気付きをくれる。(塚本)

夏の昼音楽室になり響くパーカッションを打つ手が赤い

菊池女子1年 別府 さくら

【評】吹奏楽部の夏休み中の練習風景に着目した作品である。この歌の魅力は結句の「打つ手が赤い」にある。ドラムをたたき続けた奏者の手が真っ赤に腫れあがっているのを作者は見逃さなかった。「赤い」が「真っ赤」ならもっと良かった。(橋元)

別れ道夕日に溶けるその笑顔「またね」の言葉は君に届かず

熊本1年 住永 大河

【評】いつともされないいつか、けれど確かに今という時間の吐息のような、ぼ

ろつと零れた肉声の快さがあり、青春の風格がありあり。(塚本)

久しぶり押し入れの中整理して忘れた思い出昔の自分

盲学校3年 黒木 俐玖

【評】久しぶりに押し入れの整理をしていたら幼い頃使っていた品物(玩具か)に触れたのである。その様子を「懐かしい」などと言わずに「忘れた思い出昔の自分」と客観的に表現して成功した一首。具体的な物が歌われたらもつと良かった。(橋元)

教壇に立つ先生の姿見て私もなると人生決めた

芦北3年 中野 悠菜

【評】一読、格好良いなあと嘆息。とくに結句の言葉が大胆で、冴さえている。何がしかの促しを与えてくれるのが「先生」なのであろうと改めて思う。(塚本)

▽入選

古葉翔太(熊本農2年) 齋藤菜乃葉(尚綱3年) 橋口海武(芦北1年) 須恵ゆうみ(球磨工3年) 村上菜月(済々黌2年)

▽努力賞

岩佐遥偉(盲学校3年) 田上悠翔(熊本商3年) 森山三華子(御船1年) 中島陽向(菊池女子1年) 元田瑠希也(球磨工2年) 永石悠人(熊本商3年) 石橋蓮(文徳2年) 小田朱莉(済々黌3年)

【総評】今年の最優秀賞作品は昨年に続いて部活を詠んだ作品が選ばれたが、高校生らしい上に、ぴりつと締まった見事な作品だった。優秀賞作品を見渡しても、被爆地広島を訪れた感想。将来の自分を教壇の先生に重ねた歌。入選作品の中には家庭の団だんらん欒、親との関係など学校外に取材した作品が散見された。一言で言えば、作品の多様化と言ったらいだろう。また、今年の大きな特徴として、先生に言われたので仕方なく作りましたーというような作品がほとんどなかったことである。このことは、二十年以上にわたったこの「公德文芸賞」がそれなりの浸透をみせ、熊本の高校生の文芸活動の向上に多少の貢献を果たした証拠であり、公德会に祝意を送るとともに選者として感謝するものである。公德文芸賞が今後さらなる発展を遂げ、高校文芸、中でも高校生の短歌に確かな風を起こしていくことを期待してやまない。(橋元俊樹)

今回は短歌部門に四八九首の応募をいただきましたが、指導の先生の教えをよく聞き、また短歌についてよく分からないところは質問してから作歌してほしいと思います。

短歌は万葉の時代から連綿と続く伝統詩型です。五句三十一音から成る定型詩です。

形式が決まっているのはどうも不自然で堅苦しいと感じる人がいるかもしれませんが。しかし、形式が決まっているからこそ自由に表現ができ、豊かさと奥ゆかしさがあるのです。その豊かさと奥ゆかしさは、自由な発想と折々の感情を言葉に託し、言葉を選択し、それを繋^{つな}げることによって、意味と同時にリズム（調べ）といひ、韻律ともいいます」とイメージを伝達できるのです。

そのためには、言葉を大切にしたい。「言葉はこころ」なのです。（塚本諄）

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「斑入りのてつがく」

みたす、みたされる、なんていうくだらないひかりが小窓にさして

諦めを吐きだす必要はもうないんだよ

きらいなあのこわばりのことはぼくもよく知ってる

あなただけ変わらず、罫線のない白紙の上にいる

それなのに

それなのにあなたは哲学者になれない

布団から出られないあなたは哲学者になれない

軽々と笑うぼくと違って

あなたはへとへとで生きている

愛しい人としてあなたをみとめる

それだけができない

それだってできない

この部屋は日数とか点数とかを

あなたに叩き出させようと腐心している

その小さな画面のなかに

世界を見いださせまいとしている

誰もみんな空の大きいことに気がつきたくないの

いつかの新学期

ぼくは朝のまとう排他がこわかった
世界から切り離された青空の下に
存在することが耐えられなかった
鼻呼吸よ、永遠にできない鼻呼吸よ
あなたが息をしている
羨ましさと憐れみと共感覚
あなたが何気なく食卓に置く、その疑問符を好きになる
麦茶をこと、と飲みほす音で
あるいはティッシュボックスの不足を知らない感触で
ぬいぐるみを抱えて言うゆるやかな確約で
まばゆい朝が来てしまう

熊本2年 松浦 瀬戸

【評】高度な筆力に圧倒されました。同一色の世界に浮き彫りになった、ぼくやあなたという異質な「斑」^{まだら}。喪失感を抱えながらも現実を冷視し、眩しい朝に抗^{あしが}えないもどかしさが胸に迫ります。最後五行の表現も秀逸です。(深町)

▽優秀賞

「おたからさがし」

ぱたんっ

音を立てて本を閉じる

最後の数ページだけを残して

「早く読みたい」

そんな気持ちで

大事に大事にしまい込んで

そして目を閉じる

そして旅に出る

自分だけの結末を

正しい解とはまた違う

可能性を探す旅へ

それが「ハッピー」でも、「バッド」でも
私だけの

あなただけの
すてきなすてきな冒険譚

次回予告を済ませたら
さあ、行こう
次は答え合わせの旅へ
世界にたった一つだけの
エピソードという名の宝を求め
今、
ページという名の扉を開いて

濟々鬢2年 右田 未羽

【評】作者なりの読書の楽しみ方が軽快に綴^{つづ}られている詩で、ゲートを彷彿^{ほうふつ}とさせました。想像する喜びや本を愛する気持ちがよく伝わってきます。書き方に無駄がなく、まとめ方も上手です。(深町)

「一人きり マスカレード」

仮面を外した世界はどんな色をしているだろうか
仮面を外した世界で君は笑っているだろうか
仮面を外した世界で僕は笑っているだろうか

いつからだろう
即席の仮面で隠したのは
閉ざした瞳で君を探すのは
仮面の裏に安らぎを感じるのは

なのに、なのにどうしてだろう
仮面の裏がモノクロなのは
仮面の裏が滲んで前が見えないのは
仮面の裏で暴風雨がやまないのは

仮面の裏の僕は笑えていただろうか
ずっと、ずっと前から気づいていた、気づいていたのに……
仮面に入ったヒビを何度も何度も繕って

そのたびに仮面は厚くなって
仮面の裏はいつしか音もなくなってしまった
仮面を壊せる「勇氣」という名の道具が僕にはない

ああ攫い出してほしい
仮面の裏で光を求める僕を
仮面の裏で音を求める僕を

「本物」の僕を
仮面の裏で笑い方を忘れる前に

シャル・ウィ・ダンス？
君だけの魔法の道具

熊本2年 吉原 航

【評】仮面を被った自分に絶望し、仮面をとった本当の自分を探し求めている姿が思い浮かびました。仮面を偽物の僕として象徴しながらも、孤独な舞踏会と表現している点が独創的です。(深町)

「オネガイ」

ぽっかり空いた心にぴったりはまるピースなんて
この世界どこを探したって見つかりやしない
だってもうないんだから

何度カワリを探してもはまらない
ツギハギだらけの心はもう動かないんだ
心のお医者様はとっくの昔からいやしないんだから
手を取ってほしい

強く強く握っていてほしい
もう二度と離れないように
時よ戻ってほしい

遠い遠い記憶の中に
ぎゅっと押しこめた暗い底まで
忘れたい記憶が残って君が消えてしまうなんて
隣にいてほしかった

ただいるだけでよかった
こんなワガママ叶ったりしないかな
ワガママなワタシの
ワガママなネガイ

【評】大切な存在を失い、孤独に苛まれる^{さいな}様子が伝わる詩です。いなくなった「君」が、恋人か家族かペットか、直接的に表現していない点も素晴らしく、失う悲しみに読者を集中させます。(深町)

「夜が明けなければいいのに」

春の夜は少し冷える
けどたまにぬるい風が
頬を撫でて 髪を梳く
優しい風は夢へ誘い
夢は桜のように
儂く微睡みと共に消える

夏の夜は短い
けど白昼夢を見ているようで
雨が降ることもあるけれど
その音は私にとって子守唄
思い出だけを残して夜が明ける

秋の夜は月が大きく満ちて
すすきを金色に輝かせて
虫の音を響かせて
小さい窓から射し込む光は
きつと明日を照らしてくれる

冬の夜は少し重たい
赤くなつた耳や鼻を
マフラーに隠した
刺してくるような澄んだ風
凍てついた暗い夜が
自分の心を落ちつかせてくれる

そんな静かな夜が好きだから
夜に願うように囁く
「夜が明けなければいいのに」

【評】四季それぞれの夜を描いた詩で、しっとりとした雰囲気が漂います。言葉の連なりも美しく、品性を感じます。特に各連の最終行には表現の工夫が見られ、印象に残る締めくくり方が見事です。(深町)

「弓道」

弦を引き絞り腕に重さが伝わる

弓を押し指に重さが伝わる

いつも同じ音がなるとは限らない弦音

心情が表れる矢所

真なるものは美しく 善なるものは美しい

的は鏡である

そこには

弓と矢 的と自分

それ以外なにもない

南稜2年 濱崎 美來

【評】弓を的に射るときの緊張感が伝わる詩です。そのときの様子をただ描くのではなく、五行目以降の展開では、心情を反映する弓道の本質を突いています。短いながらも完成度に優れた詩です。(深町)

▽入選

川嶋優佑美 (球磨中央3年) 今村光花 (球磨中央2年) 前村京威 (南稜3年) 高

濱菜々子 (鎮西3年) 中山天聖 (鎮西3年)

▽努力賞

村上結十 (芦北2年) 四本莉子 (尚綱1年) 亀田来実 (文徳2年) 岩佐遥偉 (盲
学校3年) 小田詩桜 (熊本はばたき高等支援3年) 田中涉雅 (熊本はばたき高等
支援3年) 秋山にこ (出水中央3年)

【総評】詩の本質は批評や比較からすり抜けていくものである。選評という矛盾した作業は重荷であるが、今回から二人で選ぶことになり気分的には楽になった。いつもながら若い人の言葉からは今年も学ぶところが多かった。例年に比べ戦争や災害をテーマにした作品はほとんど姿を消した。ただ、それはそれらが極めて日常的な事件になってしまったからかもしれない。もしかしたら、暗黒を孕

んだ日常の中で生きる、自分と他者への哲学的な眼差しまなざしや思索として深化しかけている気もする。例えば最優秀賞の「斑入りのてつがく」において歌われる「あなたの」は謎めいていて多義的である。「ゆらぐ」や「一人きりマスカレード」にも言葉による思索の初々しさを感じる。「オネガイ」や「お母さんの枕」の喪失感を読み手の心を打つだろう。「おたからさがし」には驚いた。本の結末を予想する行為は、ゲータが母親から教えられた読書法を彷彿ほうふつとさせる。やはり高校生は侮れないのだ。(内田良介)

高校生の詩は、成人した今のわたしにはない感性が煌めきらいている。言葉や表現が稚拙でも、朝の光のように、まっすぐで透明だ。今回初めて審査員を務めたが、家族愛や四季の賛美、夏の思い出などを素直に綴つづる詩が散見され、好感が持てた。また、「多様性」や「推し」など、令和を象徴する言葉を用いた詩があったことも特筆すべき点である。一方で、自己の内面を深掘りし、葛藤や衝動といった多感な精神世界を描く詩にも強く惹かれた。着飾らない言葉だからこそ彼らの哲学は剥むき出しだが、真正面から読者と向き合う真摯しんしな態度がにじみ出ている、どこか責めいたものも感じた。さらに、入賞・入選作品には、言葉にならない気持ちや冷静に見つめ、書くことで昇華している作者の姿が思い浮かべられた。詩型を意識した破綻のない書き方も共通の評価点である。凝縮した一行や、連の展開行分けなど、一定の「読ませる」技術が備わっており、感心するばかりであった。これからも詩を書く楽しさを感じながら、自分の表現を見出してほしい。そして、ぜひ書き続けてほしい。(深町秋乃)

【肥後狂句部門】

▽最優秀賞

転校生 君との記憶テラバイト

球磨中央2年 東 優希

【評】転校の別れを詠んだ唯一の句である。人とは違う着眼点が良かった。また情報量を表すテラバイトという単位を使うことで思い出の多さ、深さを表現することができた。転校しても続く友情を思わせ暖かい句である。(鳴神)

▽優秀賞

憧れて 気付いてしまう現在地

芦北3年 川畑 秀飛

【評】憧れの対象と今の自分を比べ、「よし」と思うことで憧れは目標に変わる。後は目標に向かい前進あるのみ。「現在地」の表現が秀逸である。(鳴神)

憧れて 辺りに響く排気音

熊本工3年 野口 昇大

【評】高校生ならだれでも憧れるバイクを「排気音」を使って表現した。乗ってスロットルをうれしそうに回す作者の様子が目に浮かぶような句である。(鳴神)

憧れて 三日坊主も本気だす

球磨中央1年 佐藤 美空

【評】何事も三日坊主だったのが本気で変わろうと動き始めた。生き方を変えることは人生においてそうないこと。「憧れ」に導かれ一歩踏み出した自分を褒めながら頑張ってほしい。(山野)

憧れて ホールに響く音の粒

済々黌2年 植木 倫子

【評】音楽が響く空間を音の粒と表現した感性は鋭い。音楽への熱い想いを聞いてみたいものだ。演者と観客のどちら側だったのだろうか。(山野)

転校生 一人ぼっちの帰り道

熊本工2年 平川 聖依

【評】「新しい環境の初日は長かったな」と、すぐに友達と一緒に帰る日が来て、一人で帰った日を懐かしく思い出すだろう。そんな思いが伝わってくる。(山野)

▽入選

瀬津優美香 (尚綱3年) 高村悠加 (済々黌2年) 源響也 (球磨工2年) 原田光晟 (熊本商3年) 神田源 (文徳1年)

▽努力賞

藤岡優衣 (熊本工1年) 尾方瑛人 (球磨工1年) 横山侑加 (熊本はばたき高等支援1年) 那須千里 (球磨中央2年) 渡邊皓亮 (松橋支援1年) 北岡侑晟 (芦北支援1年) 尾之上まりな (球磨中央2年) 井手快成 (球磨工3年) 馬場風熙 (芦北1年) 宮本ちさき (熊本工2年)

【総評】肥後狂句部門への応募が増えたことに驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。すばらしい発想の句、高校生らしい素直な句にたくさん出会うことができました。狂句のルールが守られてきたこともうれしく思います。

肥後狂句の本質は「^{うが}穿ち」であると言われます。物事の本質や人情の機微を句

に詠みこむのです。そこにユーモアや批判精神が盛り込まれ数々の名句が生まれてきました。

今回も思い付きをそのまま句にしたものが多くありました。それは人と同じような句になってしまうことを意味します。発想を広げ、笠を裏から眺めながら何句も作るうちに人とは違う良い句が生まれます。句から何かを想像させる、句を通して人や状況が見える、そんな句ができたらいいなと思います。今回選ばれた句はそういった意味でどれも秀でていました。人生のどこかで肥後狂句を思い出し、取り組む機会があれば幸いです。(鳴神景勝)

たくさんの投句をいただきまして、うれしく思います。一緒に狂句を広めてゆきましょう。そのためにもルールをさらに学び、より狂句に興味を持ってください。

今回、自信の作品なのに選ばれなかったと嘆いていませんか。それは、あなたと同じ句(合句)や似たような句(類句)がたくさんあったためです。できた句が話し言葉になっていきますか？ 字余り・字足らずはアウトです。これらは基本的なものです。ここでの取りこぼしは避けたいものです。

ぜひみなさんのみずみずしい感性で、ウィットに富んだ作品を詠み上げて周りの人に笑顔を与えたり、うなずかせたりと、思いを十二音に託しましょう。慣れるまでは指を折って声に出しましょう。期待しています。また狂句でお会いしましょう。(山野風船)